

陸隴其の学問における朱子の思想遍歴について

尾崎 順一郎

はじめに

陸隴其（一六三〇—一六九二）、初名は龍其、字を稼書と言う。浙江平湖の人である。康熙九年（一六七〇）に四十一歳で進士に合格し、嘉定県や靈壽県の知県として治績を挙げた後、康熙二十九年（一六九〇）には四川道監察御史に就任した。だが、捐納保挙をめぐる意見の対立により、翌年には早々に職を辞するに至っている。^①このように、陸隴其は官僚としては大成することはなかったが、一方で没後三十年を経た雍正二年（二七二四）には「醇儒」として清朝の学者では初めて文廟に從祀され、^②四庫館臣からは「隴其の学は、一に朱子を以て宗と為し、近儒の中に在りては最も醇正と称せらる」と評されるなど、清初を代表する朱子学者として名を挙げている。

陸隴其の朱子学に関する著作は、その内の大部分が四書学に関連するものであり、『三魚堂四書大全』・『四書講義困勉録』・『四書講義統困勉録』・『松陽講義』などが挙げられる。彼はこうした編纂物の中で朱子の学問の解明を試みるとともに陽明学に対する批判も展開するが、陸隴其による朱子学の顕彰・陽明学への批判は、こうした経典解釈だけに止まらない。たとえば、その取り組みの一つとして、書籍の出版・普及活動を挙げることができる。陸隴其は清・張烈撰『王学質疑』（康熙二十四年「二六八五」刊）^③や元・程端礼撰『程氏家塾讀書分年日程』（康熙二十八年

「二六八九」刊）、そして明・陳龍正輯『朱子語類』（刊行年不明）の出版を行っている。また、清・刁包撰『四書翊注』については出版こそ実現しなかったが、出版計画までは立てていたようであり、明・陳建撰『学蔀通弁』については間接的にはあるが、その出版にも関わっていた。

この陳建の『学蔀通弁』（嘉靖二十七年「一五四八」自序）は、儒仏や朱陸が混淆した事態を憂慮して編纂された書籍であり、特にその前編では程敏政の『道一編』や王守仁の『朱子晚年定論』が提示した朱子の思想遍歴に対する認識を是正すべく、朱子の著述に関する繫年考証を行い、朱陸早同晩異説を提示している。^④陸隴其はこの『学蔀通弁』に対して並々ならぬ関心を寄せており、『王学質疑』や『程氏家塾讀書分年日程』とともに、多くの知友に対して閲読を勧めたり、書籍そのものを贈ったりするなどしていた。^⑤

陸隴其の『学蔀通弁』への関心は、従来の研究でも注目されてきたが、陸隴其自身が『学蔀通弁』をどのように利用していたのか、あるいは陸隴其の学問において朱子の思想遍歴がどのような意義を持つのかということについては、必ずしも踏み込んで検討されることはなかったように思われる。そこで、本稿では、陸隴其の朱子学理解の一端として、朱子の思想遍歴に対する陸隴其の考え方を明らかにして行きたい。

まず、第一節では、陸隴其と『学蔀通弁』との関連を整理し、その上で『読朱随筆』という著述について検討を行う。この『読朱随筆』は『学

「学菴通弁」にも言及しながら、朱子の思想遍歴に関する陸隴其の見解が示されており、「朱子の初中晩の説、異学の得て顛倒する所の者に非ず」と称されている。そこで、上記の作業を通して、朱子の思想遍歴に対する陸隴其の基本的な認識を探って行く。

次に、第二節では、前節での考察内容を踏まえながら、陸隴其が先儒や同時代人の朱子学理解に対して、どのように向き合っていたかを検討する。『読朱随筆』の中には劉宗周の『聖学宗要』で示された朱子学理解への批判があり、また康熙二十年代前半には『紫陽大指』の著者である秦雲爽と朱子学理解について議論が交わされている。これらはいずれも朱子の思想遍歴に立脚した論述がなされていることから、こうした資料の検討を通して陸隴其の学問における朱子の思想遍歴の意義について考えてみたい。

一 『学菴通弁』の受容と朱子の思想遍歴に関する理解

順治十四年（一六五七）八月、陸隴其は二十八歳で初めて郷試に応じたものの、結果は不首尾に終わった。そこで、彼は官僚として出世していくことを断念し、かねてより望んでいた学問の研鑽に励むこととした。その際、彼が手にしたのが「四書大全」である。¹⁰

陸隴其の「三魚堂四書大全序」¹¹によれば、彼は順治十五年（一六五八）から康熙二年（一六六三）に至るまでの六年の間に「四書大全」の校訂作業を行った。また、彼はこれと同時期に「明季諸先輩の説」を集めた「困勉録」前編の編纂を行っており、さらに康熙三年（一六六四）からは後編の編纂にも着手している。だが、これらはいずれも陸隴其の存命中に完成することはなく、康熙三十八年（一六九九）に門人たちの手によって『三魚堂四書大全』と『困勉録』・『続困勉録』として整理・出版されるこ

ととなった。では、なぜ陸隴其は生涯を通して、これらの編纂・校訂作業に従事することとなったのか。その理由の一端が次の発言に示されている。

順治十五年から康熙二年にかけて、六年ほど「四書大全」の校訂作業に尽力し、ようやくその作業を終えた。だが、この時は読書における門戸の見を大まかに理解してはいたものの、程朱の語録や文集はどれも目を通していなかったし、薛瑄・胡居仁ら諸君子の書はどれも探し求めていなかったし、嘉靖・隆慶以後の陽儒陰積の徒で、顔を挿げ替え、是に似て非なる者たちについては、その菴障さまたけにすべて触れているわけではなかった。そこで、康熙九年（一六七〇）以降、諸家の書を徹底的に探し求め、これらを見ていくと、先の取捨選択が十分ではないことに気づいたのである。（自戊戌至癸卯、用力六年而始畢。然是時、雖粗知読書之門戸、而程朱之語録・文集皆未之見、敬軒・敬齋諸君子之書皆未之求、嘉隆以後、陽儒陰積之徒、改頭換面、似是而非者、猶未尽触其菴。自庚戌以來、乃始悉求諸家之書觀之、然後知向之去取未能当。）¹²

これによると、陸隴其は康熙二年の段階で、「四書大全」の校訂作業や「困勉録」の編纂作業を終えたものの、程朱の語録や文集、薛瑄・胡居仁ら明代朱子学者の書を十分には目を通しておらず、さらには陽明学者たちが聖人の教えをどう阻害しているのかも捉え切れていなかった。こうした指摘は、当時の陸隴其の読書環境が少なからず制約を受け、陸隴其自身もそれを自覚していたことを示している。かくして、陸隴其は書籍の探訪に励むこととなる。陸隴其の『三魚堂日記』を通覧すると、確かにその後の彼が書籍を積極的に購入・収集したり、学友や門人から書籍の借用や提供を受けたりしていることなどが数多く記されている。

それでは、陸隴其はいつ『学菴通弁』を目にする機会を得たのだろうか

か。現在、陸隴其が確実に『学蔀通弁』を目にした時期については、康熙十四年（一六七五）まで遡ることができる。同年七月、陸隴其は嘉定県に知県として赴任するに当たり、陸公鏐を連れ立って任地に赴こうとした。ところが、陸公鏐は既に滎陽の知県として赴任する顧天挺（字は蒼巖、陸隴其とは同じ平湖の出身であり、郷試・会試も同年の合格であった。光緒『平湖県志』巻十六に立伝されている。）の招聘を受けて同行することとなっていたため、陸隴其の要請を断らざるを得なかった。そこで、陸隴其は出發を前にした陸公鏐に対して餞別として『学蔀通弁』を贈ったのである。¹⁵このことからすれば、陸隴其はこの時点で既に『学蔀通弁』を実見し、しかも相当の思い入れを持っていたことが窺える。

もつとも、『学蔀通弁』をめぐる彼らの関係は、これで終わったわけではない。康熙十七年（一六七八）五月、顧天挺は『学蔀通弁』を滎陽で発行した。¹⁶その知らせは八月に翌年の博学鴻儒に応じるために北京に滞在していた陸隴其に伝えられ、十月には陸隴其のもとに届けられた。¹⁸本書の出版に至るまでに、三者が連絡を取り続けていたことが窺える。なお、この顧天挺本『学蔀通弁』は、後に張伯行が編纂した「正誼堂全書」に収録されたため、現在はこれを通して顧天挺本を想見することができる。¹⁹ つづいて、『読朱随筆』の検討に移ろう。

『読朱随筆』は康熙十九年（一六八〇）に完成したものの、本書は陸隴其の存命中には刊行されなかった。康熙四十六年（一七〇七）夏、張伯行は福建巡撫を拝命し、陸隴其の未刊書を探訪させたところ、陸隴其の女婿にあたる曹宗柱が家蔵書の中から『読朱随筆』とともに『読礼志疑』『問学録』『松陽鈔存』を提供したことから、康熙四十七年（一七〇八）に「正誼堂全書」の一部として刊行されることとなった。²⁰

本書は陸隴其が「朱子大全」、すなわち朱子の『文集』一百卷、『続集』十一卷、『別集』十巻を読んだ際に、気に留めた文章に案語を附したもの

である。ただし、案語の範囲は全体に及んでいないわけではなく、詩・賦・劄子などを収録した『文集』二十九巻までを除き、三十巻以降がその対象となっている。陸隴其は『読朱随筆』の中で朱子の学問への向き合い方を称賛したり、陽明学批判を展開したりもするのだが、やはり随所で目にするのは「朱子の初中晩の説」に関する指摘である。そして、その際には『学蔀通弁』にもしばしば言及するのだが、意外にも陸隴其はその説を退けることが多い。

陳建は『学蔀通弁』の中で、朱子の生涯を陸象山の思想との近似性の面から三期に区分した上で、年月を追いながら朱子の文章が書かれた時期を特定する。その三期とは、①早年「生年から四十四歳まで」「禅学に入し、象山とは面識はなかったが、期せずして一致するところがあった時期、②中年「四十五歳から五十七歳まで」「陸象山と面識を得て、自説を洗練しつつも、疑信相半ばしていた時期、③晩年「五十八歳から逝去まで」…朱陸の立場は氷炭相容れざるものとなり、朱熹は象山没後に激しく攻撃した時期を言う。²¹

この点を踏まえた上で、『読朱随筆』を見てみると、陸隴其は陳建とは異なる見解をそのまま提示していることに気づく。たとえば、『文集』巻四十「答何叔京」第十三書について、陸隴其は「此の書、陳清瀾篇首の「賑糶事」を以て之を考ふるに、亦た是れ中年未定の論なるを知る」と言い、陳建の説を踏まえて中年の作としているが、陳建自身は『学蔀通弁』の中で早年の乾道四年（三十九歳）の作とする。また、『文集』巻五十一「答程正思」第十六書について、陸隴其は「此の条亦必ず是れ晩年に象山の為にして発す」と言い、さらに同巻五十一「答程正思」第十九書についても、「已に学蔀通弁に載る」と言い、どちらも晩年の作と見なそうとする。²⁴だが、陳建は『学蔀通弁』の中で、前書を中年の淳熙十三年（五十七歳）と見なし、後書を晩年の淳熙十六年（六十歳）の作と見なしている。²⁵

では、なぜこうした相違が生じるのだろうか。ここで着目したいのが、魏校の『莊渠遺書』卷三に収録される「与余子積」という文章である。陸隴其は嘉定知県在任中の康熙十四年から十五年（一六七五—一六七六）の間に本書を得たものの、それは端本であったため、「与余子積」を見るのができなかつた。ところが、康熙十七年（一六七八）に門人の周梁から本書の完本を提供されたことで、ようやくその全貌を見るに至った。その時、彼はこの文章を「莊渠の学頗る正し」と評している。実は、陸隴其の所見は、この魏校の見解に通じるところが多いのである。

では、魏校はどのような見解を持っていたのか。彼もまた朱子の思想遍歴を三期に区分するが、朱子の工夫論に着目している点で陳建とは異なっている。その三期とは、①早年・李侗に学んで若年期に傾倒した禅学の誤りに気づき「存齋記」などを著していた時期、②中年・張栻と面識を得て、その察識端倪説に触れ、「中和旧説」を主張した時期、③晩年・已発明未発説を改定して以降の時期を言う。なお、魏校は陳建のよう具体的に年齢を示していない。ここでは仮に明・戴銑『朱子実紀年譜』などによってその年齢を示しておく、①李侗に学んだ早年は二十四歳から、②張栻と面識を得た中年は三十八歳から、③已発明未発説を改めた晩年は四十歳からということになる。そして、この点を踏まえて、前掲の陸隴其の早中晩年の区分を見ると、魏校の考えと一致することが分かる。

だが、陸隴其は陳建の説を全面的に捨て去るまでには至らなかつた。次に掲げる『文集』卷四十五「答廖子晦」第一書に対する論述からは、彼が陳建説と魏校説とを折衷しようとする苦心している様子が窺える。

この一条は、中和の境界を最も明晰に述べており、中和旧説とは異なる。これはきつと朱子が四十歳以後の発言に違いない。大抵、朱子と象山とは、この時期ではまだ著しく氷炭の関係にあつたとは

言い切れない。朱子が象山を論じた部分は、なお中年未定の見に属している。きつと、この時に象山と知り合つても論破できなかったと思われる。だが、朱子自身の取り組みは、言うまでもなく既に本末は兼ね備わり、確かに定見があつた。そのため、学部通弁が論じる朱子の学の三変は、朱陸異同の観点から論じたものである。一方、魏校の「与余子積書」が論じる朱子の学の三変は、朱子自身の取り組みから論じたものである。（此一条、説中和界限最明、与中和旧説不同。此必是朱子四十以後之言。大抵朱子与象山、此時猶未甚氷炭。其論象山处、尚属中年未定之見。蓋縁此時識象山未破也。而其自家用工、則固已本末兼備、確有定見矣。故学部通弁所論朱子之学三变、以朱陸異同而言也。魏莊渠与余子積書所論朱子之学三变、以朱子自家用功而言也。）^⑧

『文集』卷七十五に収録する「中和旧説序」によると、朱子は淳熙五年（一一七七）四十歳の時に、それまで張栻の察識端倪説に触れて構築していた自説が誤りであつたことに気づいて已発明未発説を確立し、かつて張栻に送つた四通の書翰を旧説の名残として「中和旧説」と総称することとした。陸隴其は冒頭でこの書翰の内容が、「中和旧説」の趣旨と異なることから、四十歳以後の作と見なすが、この書翰を魏校と同様に晩年の作とするのではなく、陳建と同様に陸象山とは「氷炭」の関係に至つていない中年の作と言う。ただし、その一方で四十歳の時点で已発明未発説を確立していたことから、「固より已に本末兼備し、確として定見有り」とも指摘する。ここで言う「定見」とは、魏校の語でもある。陸隴其は魏校と同じく朱子の思想遍歴を工夫論に着目して捉えつつも、その晩年については更なる変化をも想定しようとしていたと言えよう。

事実、こうした考え方は、次節で検討する「答秦定叟書」にも現れている。陸隴其はこの書翰の中で、「朱子の学は一たび未発の中を悟るの後に定まり、再び退きて之を句説文義に求むるの後に定まる」と指摘する。

彼はこのように考える理由として、それぞれ『文集』卷四十三「答林枳之書」と同卷三十八「答薛士龍書」とを挙げている。陸隴其がこれらの書翰の具体的な執筆時期をどう考えていたかは定かではないが、これらを四十歳以降の作として扱っていることから、彼が晩年期における更なる思想遍歴を考えていたことが窺える。

さて、このように見てくると、陸隴其は『学部通弁』を盛んに称賛し、書翰などの資料の繫年に従うことはあっても、思想遍歴に関する区分では完全に従っていたわけではなく、むしろ魏校と同様に已発未発という人間の意識に関わる考え方の変遷に着目していたことが確認できる。

二 劉宗周『聖学宗要』と秦雲爽『紫陽大指』への批判

陸隴其による最も早い時期になされた程敏政『道一編』や王守仁『朱子晚年定論』への批判は、康熙十一年（一六七二）に編纂された『問学録』の中に見えている。だが、ここでは陳建『皇明通紀前編』と陳龍正『陽明先生要書』からの引用が示されるばかりで、朱子の思想遍歴に関する陸隴其の見解はまだ示されていない。陸隴其が朱子の思想遍歴に関する見解を示すのは『読朱隨筆』の編纂を待たねばならないが、彼は本書の編纂を機に朱子学に対する誤解を是正するためにも着手する。本節では、特にその考えが顕著に現れている劉宗周の『聖学宗要』と秦雲爽の『紫陽大指』に見える朱子学理解に対する批判を通して、陸隴其の学問における朱子の思想遍歴の意義を探っていくことにしたい。

(1) 劉宗周『聖学宗要』への批判

崇禎七年（一六三四）、劉宗周は友人の劉去非が周敦頤の「太極図説」、張載の「西銘」、程顥の「定性書」、朱子の「已発未発説」を収録する『宋

学宗源』を編纂したことに示唆を得て、これらの文章の他に張載の「東銘」、程顥の「識仁篇」、朱子の「已発未発全説」、そして王守仁の所説で「程朱と相發明する者」として「良知答問」「拔本塞源論」を付け加えて、『聖学宗要』を編纂した。ここで言う朱子の「已発未発全説」とは、朱子が張枳らに送った四通の書翰、すなわち①「与張欽夫」〔『文集』卷三十、第三書〕、②「答張敬夫」〔『文集』卷三十二、第四書〕、③「答張欽夫」〔同、第十八書〕、④「与湖南諸公論中和第一書」〔『文集』卷六十四〕を指しており、劉宗周はこれらを「中和説」とも称している。ただし、この「中和説」に収録される書翰は、前二書が所謂「中和旧説」に相当し、後二書が已発未発説定立後のものに相当するため、これらの書翰を一緒くたに取り上げるとは朱子の意図に沿っているとは言い難い。だが、劉宗周はこれら四通の書翰を通して、朱子の考えが徐々に進展したことを示そうとした。そのため、劉宗周自身は「中和説」に独自の朱子理解を示そうとしているわけだが、ここではあくまでも陸隴其が劉宗周の見解をどのように批判したのかに重点を置いて検討していきたい。

まずは、①「与張欽夫」に対する考え方から見て行こう。

そもそも、日常的な物事へと向かう人間の意識のはたらきを已発と見なすのに対して、一時的に意識のはたらきが中断し、物事に接していない状態を指して未発の時と見なせるでしょうか。試みに、こうした観点に即して未発を考えてみますと、ほんやりとして意識がはたらいっていない時は、真つ暗に覆われており、偏ることなく明晰に物事に応じる本体ではないように思われます。それでいて、僅かな時でも意識がはたらくと、もはや已発となってしまう、寂然とは言えません。こうした観点からでは、考えれば考えるほど、分かんなくなってしまうでしょう。そこで、日常生活の中で確かめてみますと、そもそも物事を感じ取って反応したり、物事に触れて意識

をはたらかせたりするのは、きつと渾然一体として物事に対応し行き詰まることのないものがあるからです。これこそが天命が隅々まで行き渡って、際限なく万物を生み育てるはたらきであり、人間の意識は一日の内に何度も生滅するにしても、その寂然とした本体は、常に寂然としているのです。未発とはこのようなものです。そもそも、特定の時間や場所に限定的に存在する物体を「中」と言えるのでしょうか。(夫豈以日用流行者為已發、而指夫暫而休息、不与事接之際為未發時耶。嘗試以此求之、則泯念無覺之中、邪暗鬱塞、似非虛明応物之体。而幾微之際、一有覺焉、則又便為已發、而非寂然之謂。蓋愈求而愈不可見。於是退而驗之於日用之間、則凡感之而通、触之而覺、蓋有渾然全体応物而不窮者。是乃天命流行、生生不已之機、雖一日之間万起万滅、而其寂然之本体、則未嘗不寂然也。所謂未發如是而已。夫豈別有一物、限於一時、拘於一處、而可以謂之「中」哉。)

これによると、朱子は日常的な物事に対して意識がはたらいっている状態を已発と捉えるのに対して、人間が天から賦与された、あらゆる物事に的確に応じることのできる本体を未発と捉えており、しかもこの本体としての未発が人間の意識として現れると考えようとしていたことが分かる。これに対して、劉宗周は朱子が「幾微の際に、一たび覚すること有らば、則ち又便ち已発と為りて、寂然の謂に非ず」と論じた点には不満を覚えつつも、「論じていることはおおむね正しく、(未発は)特定の時間や場所に限定的に存在するものではない(説得大意已是、猥不是限於一時、拘於一處)」³⁸⁾と言いつつ、「中和旧説」で示した未発説を是認する。しかしながら、陸隴其は①「与張欽夫」の題下で朱子が「この書翰で述べた考えは正しくない。これを残して議論の成り行きを示すに他ならない(此書非是。但存之以見議論本末耳)」と記すのに、劉宗周が「中和説」の中に取り入れたのは、劉宗周が朱子の意図を無視して自説に都合よく利用し

ようとしているからだと批判する³⁹⁾。また、劉宗周は②「答張敬夫」についても、「天命の性」すなわち未発が人間の意識のはたらきを「主宰」するとの見解を示して、朱子が「中和旧説」で提示した未発説を受け入れるが、陸隴其は『文集』卷三十二「問張敬夫」第六書の表現を根拠に、「主宰」の語は「心」を指すと反論する⁴⁰⁾。要するに、陸隴其は劉宗周が自身の本体論を補強するために、「中和旧説」で示された未発説を取り込もうとしていることを問題視するのである。

つづいて、已発未発説定立後に著された、③「答張欽夫」と④「与湖南諸公論中和第一書」に対する考え方を見て行こう。ここでは工夫論に関する議論が行われる。

まず、③「答張欽夫」について、劉宗周は朱子の論点「心を手掛かりとして主敬の説に言及している(以心為主及主敬之説)」と捉えた上で、その敬については「仁を求むる工夫は只だ是の一敬のみ、心に動靜無く、敬に動靜無し」と論じている⁴¹⁾。そして、④「与湖南諸公論中和第一書」については、朱子が「中和旧説」の時点では、意識がはたらいっている状態を已発と捉え、その意識の端緒を察識することを日常的な工夫と位置づけ、未発の性に対する工夫としての涵養を疎かにしていたと述懐していることから、劉宗周は朱子の工夫論が次第に未発を対象とするものへと向かい、主静へと行き着くこととなったと主張する⁴²⁾。

これに対して、陸隴其は劉宗周が③「答張欽夫」の冒頭部分を引用するだけで、書翰全体の趣旨が「心に動靜有り」という点にあることを無視して、敬に対する誤った認識を示していることを批判する。そして、この「心に動靜有り」という考え方は、④「与湖南諸公論中和第一書」にも共通することから、朱子の工夫論が主静へと向かったという見解も受け入れられないと考える⁴³⁾。

このように見てくると、陸隴其は劉宗周が朱子の思想遍歴を考慮せず、

朱子の本体論と工夫論とを自説に都合よく解釈していたことを問題視していたことが窺えよう。

(2) 秦雲爽『紫陽大指』への批判

『紫陽大指』は『四庫全書総目』巻九十七・儒家類存目三に「江蘇巡撫採進本」が著録されるが、今は「南京図書館蔵清紅格鈔本」(『四庫全書存目叢書』子部第二十二冊)が伝えられるだけである。これによると、本書は全八巻からなり、巻ごとに「朱子初学」・「論已発未発」・「論涵養本源」・「論居敬窮理」・「論致知格物」・「論性」・「論心」・「論太極」という項目を立てている。秦雲爽はその中で関連する朱子の文章を引用するとともに、それらの文章に対して自らの見解を述べている。また、本書は順治十八年(一六六一)に完成した後、抄写して世に伝えられたが、それと並行して改訂作業が試みられており、その際には「守仁の論も亦た間ま附載して以て互いに証する」という措置が講じられている。こうした措置が陸隴其の反発を招くことになったことは想像に難くない。そして、秦雲爽は康熙二十年(一六八一)に友人の俞彙嘉から資金援助を受けたことで、漸く出版の目途が立ち、同年六月にはその「凡例」を著している。⁴⁶⁾

同年十月十七日、陸隴其のもとへ秦雲爽から書翰とともに『紫陽大指』が送られて来た。ところが、陸隴其は直ちに返答するのを避け、康熙二十二年(一六八三)四月になって漸く返書をしたため、「陽明学の領域を抜き切れていないようであるのは、朱王両家の分岐点について区分できていないからである(猶似未能尽脱其範圍、所以於兩家分途處、猶未劃然)」と批判した。これに不満を覚えた秦雲爽は、康熙二十四年(一六八五)にあらためて陸隴其のもとへ書翰とともに「答中孚(李顥)・潜齋(応搗謙)・拡菴(未詳)諸書刻本」を送り届けた。すると、陸隴其は速やかに反論の書翰(『三魚堂文集』巻五「答秦定叟書」)を送付した。残念ながら、今は秦

雲爽の書翰が伝わらないため、以下においては陸隴其の書翰を中心に検討を進めて行くこととする。

陸隴其は秦雲爽への書翰の中で『紫陽大指』などへの疑問点を列挙する。その内の一つ目が、陽明学の弊害に対する認識の相違である。陸隴其は陽明学の弊害は「無善無悪」説にあると考えていた。ところが、秦雲爽は朱子が已発未発説を確立した際に、物事に対して意識が生じているかどうかという点で已発と未発とを区別したにも関わらず、陽明はこれらを区別しなかったことを問題視し、「無善無悪」については「是れ名言の失にして、大義の謬に非ず」と言い、「無善無悪」を容認する考えを持つていた。そこで、陸隴其は朱子の考えと「無善無悪」との弁別を試みる。

朱子の中和旧説は、やがて後悔することになる考え方ではあるものの、「心は已発と為し、性は未発と為す」という主張は、至善無悪を指して言うものでもあり、陽明の無善無悪とは堂屋の柱と草の茎ほどの違いがある。たとえ、朱子が旧説を守って変更しなくても、そのまま陽明とは同じということはない。(朱子中和旧説、雖属已悔之見、然所謂「心為已發、性為未發」、亦指至善無悪者言、与陽明之無善無悪相楹莛。即使朱子守旧説而不變、仍与陽明不同。)

朱子の「中和旧説」では、已発は人間の心が日常的な物事に対して意識をはたらかせることを言い、未発は人間が天から賦与された、あらゆる物事に的確に応じることのできる本体のことを言い、この未発の性は人間の意識として顕現すると考えられていた。そこで、陸隴其はこの已発と未発の関係を説明するために、「心は已発と為し、性は未発と為す」という言葉を持ち出し、未発の性があらゆる物事に対応できる点を捉えて「至善無悪」と称する。一方、「無善無悪」は、人間に備わる良知が日常の事柄として現れるという点では、朱子の「中和旧説」と似た発想と

言える。だが、「無善無悪」は既成の善悪観念を離れ、個別の状況に依じて善悪の判断が下されるという考え方であることから、陸隴其にしてみれば、善悪に対する価値基準を備えていないという点で「至善無悪」に劣るものでしかなかった。そのため、彼は朱子が「中和旧説」を維持し続けたとしても、陽明とは同じ考えには至らなかつたと指摘する。^④

次に、陸隴其は秦雲爽の考える朱子の思想遍歴に対して反論を試みる。秦雲爽は朱子が已発未発説を確立するまでに三変したと考えており、乾道三年八月以前に「答何叔京書」を著した時期を第一期と見なし、張栻と面識を得て「中和旧説」を唱えた時期を第二期と見なし、已発未発説を確立した時期を第三期と見なしていた。^⑤これに対して、陸隴其は朱子の思想変化を「答何叔京書」に見出すことに異を唱える。というのも、この書翰は陽明が晩年の作と見なしたものであり、そこに陽明の影響を感じ取ったからである。そこで、陸隴其は朱子の思想遍歴を論じて行く。

陸隴其によると、朱子は二十四歳から三十五歳までの十年余りの間、李侗の学問に接する機会を得た。朱子はこの間に李侗から「静中に喜怒哀楽が未発である際の気象を体認すること（静中觀喜怒哀楽未発気象）」と「繰り返し推考して理を究明すること（反覆推尋以究斯理）」とを教えられたが、当時の朱子はその教えを受け入れることができなかった。そのため、「中和旧説」を唱えたり、「答何叔京書」を著したりしていた。だが、やがて李侗が逝去し、朱子が四十歳になると、次第にその言葉を思い出し、李侗から授けられた二つの教えを居敬・窮理として受け入れるようになったという。^⑥また、これに関連して、陸隴其は秦雲爽が居敬を重んじて格物を軽んじるため、陽明の「古本大学」をも重視していることも非難する。^⑦このように、陸隴其は朱子の学問遍歴に対する秦雲爽の認識を是正するとともに、朱子の思想遍歴を辿ることで朱子が居敬と窮理のどちらをも重視していたことを確認するのである。^⑧

そこで、陸隴其はさらに秦雲爽の工夫論にも切り込んで行く。とりわけ、陸隴其が問題視したのは、秦雲爽の敬と静に対する考え方である。

かつて、朱子が敬に言及する際に、常に「略綽提撕」と述べているのを見かけました。これは学ぶ者が敬に対して過剰に取り組み、切迫した状態に陥るのを避けられなくなるのを危惧したからに他なりません。そのため、延平の「喜怒哀楽の未発を觀ず」という一句について、朱子は当初はその教えに背いていたのを後悔して胸に刻むようになったものの、「觀」の一字については、最後まで決して従おうとしなかつたことが、劉淳叟への返書などに見えています。觀心説一篇では、「觀」の弊害を突き詰めて論述し、釈氏を対象として論じていますが、延平の言葉に弊害がないわけではなく、その対象に含まれています。このことは、敬に尽力する者が知らないわけにはいかないことです。（嘗觀朱子之言敬、每云「略綽提撕」。蓋惟恐學者下手過重、不免急迫之病。故於延平「觀喜怒哀樂未發」一語、雖悔其始之辜負而服膺之、然於「觀」之一字、則到底不敢徇、見於答劉淳叟諸書。至觀心説一篇、極言「觀」之病、雖指仏氏而言、而延平之言不能無病、亦在其中。此用力於敬者、所不可不知也。）

ここでは、朱子の言う敬について説明する。陸隴其は朱子が敬を重視していたことは認めるものの、一方で朱子は敬への取り組みを過剰に意識してしまうことを警戒し、むしろ「ゆつたり（略綽提撕）」と取り組むことを求めていたと主張する。

また、朱子は「敬字の工夫は動静を通貫するものの、必ず静を根本に据えている」と言いつつも、一方では「取り立てて静坐を工夫の一つと見なす必要はなく、一敬字に取り組んで動静を通貫するだけである」と言い、また「明道は静坐によって学ぶことができる」と言い、上蔡も殊更に静に取り組んでも妨げはないと言う。こうした

考え方は結局のところ些か偏っている。わずかでも偏れば弊害を生じてしまう」とも言っています。そもそも、楽記の「人生而静」と太極図の「主静」は、どちらも敬を指して述べたものであり、物事が生じていない時には、その心は落ち着いており、意識が他に向かないようにするのであって、人間が物事を取り除き、ひたすら意識を寂滅に求めて、仏家の坐禅のようにすることを望んでいるのはありません。高景逸はこのことを理解しておらず、かえって静に専念し、さらには静坐には七日を必要として、大本を涵養すると称していたが、これでは釈氏の寂滅に入ってしまった、朱子の言う静とは違うということに気づいていない。このことは、静に尽力する者が知らないわけにはいかないことである。(又朱子雖云「敬字工夫、通貫動静、而必以静為本」、却又云「不必特地將静坐做一件工夫、但看一敬字通貫動静」、又云「明道說静坐可以為学、上蔡亦言多著静不妨。此說終是小偏。纔偏便做病」。蓋樂記之「人生而静」、太極図之「主静」、皆是指敬而言、無事之時、其心収斂、不他適而已、非欲人謝却事物、専求之寂滅、如仏家之坐禅一般也。高景逸不知此、乃専力於静、甚至坐必七日、名為涵養大本、而不覺入釈氏之寂滅、亦異乎朱子所謂静矣。此用力於静者、所不可不知也。)

ここでは、朱子の言う静について議論する。陸隴其は朱子の発言見れば、敬の工夫は静だけでなく動に対する工夫でもあることが分かったと主張する。その上で、儒仏の間では静に対する認識が異なっており、儒者の言う静とは日常生活の中で生じる物事に対して、人間の心が思慮分別を生じる前の状態を言うのであって、釈氏が主張する寂滅の境地とは異なるものであるとも指摘する。⁵⁴ 陸隴其としては、朱子の思想遍歴に目を配りながら、敬や静の内実を捉え直すことで、秦雲爽の朱子学理解が実態から掛け離れていることを示そうとするのである。

この他に、陸隴其は秦雲爽が陽明の良知を孟子の性善と同一視してい

陸隴其の学問における朱子の思想遍歴について

ることや、陽明の学問が「己の為にして勝ちを好むの心を扶む者に非ず」と主張していることに対して批判を行っているが、ここでは検討を省略する。ともあれ、陸隴其は秦雲爽が陽明に対して已発と未発とを区別していないことに不満を抱いた部分以外は、全て陽明に迎合するものであると断るのである。⁵⁵ 陸隴其にしてみれば、秦雲爽が提示する朱子学理解は、朱子の思想遍歴を誤って認識し、陽明の考えを織り交ぜて構築されたものに過ぎなかったのである。

さて、本節では劉宗周と秦雲爽の朱子学理解に対する陸隴其の批判について検討を行なってきた。陸隴其は朱子の已発未発説が確立するまでの思想遍歴に着目することで、彼らが提示した本体論や工夫論、さらには陽明学との違いをも示そうとしていた。多様な朱子学理解が存在する中で、陸隴其は朱子の思想変遷に立論や批判の根拠を見出し、いたわけである。してみれば、陸隴其が朱子の思想遍歴を取り上げるのは、陽明学への批判を念頭に置きつつも、同時代人の朱子学理解の是正をも視野に入れていたと言えるだろう。

おわりに

本稿では朱子の思想遍歴に対する陸隴其の考え方を明らかにするとともに、それが持つ思想的な意義について考察を行ってきた。以下、本稿の考察内容を整理し、論述を終えることにしたい。

まずは、朱子の思想遍歴に対する陸隴其の基本的な認識について検討を行った。陸隴其は日頃から『学部通弁』を称賛し、多くの知友に閲読を勧めたり、書籍そのものを贈ったりするなどしていたが、『読朱随筆』の中では朱子の文章の著作年代を特定する際には肯定的に利用することはあっても、朱子の思想遍歴に対する考え方は必ずしも採用していな

かった。むしろ、陸隴其としては、魏校のように已発未発説の変遷に即して自説を組み立てようとしていたのだが、それはあくまでも「三変」という大枠の議論であり、朱子はその晩年においても少なからず物事の考え方を変化させているという認識を持っていた。

次に、劉宗周と秦雲爽の朱子学理解に対する陸隴其の批判について検討を行った。陸隴其は劉宗周が『聖学宗要』で示した朱子学理解は、朱子の思想遍歴を考慮することなく、みずからの考える本体や工夫に合わせて、朱子の学説を利用して、彼が朱子の思想遍歴を誤って認識し、陽明の考えを織り交ぜて構築されたことを批判していた。また、秦雲爽が提示する朱子学理解に対しては、彼が朱子の思想遍歴を誤って認識し、陽明の考えを織り交ぜて構築されたことを批判していた。陸隴其は朱子の思想変遷に対する理解が、当時行われていた朱子学理解に対して批判をする際の効果的な手段として理解した上で積極的に活用していたのである。

陸隴其は朱子学を尊び、陽明学を批判した「尊朱黜王」の思想家と見なされる場合があるが、これはあくまでも便宜的な分類に過ぎない。本稿の考察からだけでも分かる通り、彼は朱子学に対する誤解を是正することにも使命を感じていた。その際に、彼は朱子の思想遍歴に対する分析を自らの学問の中に取り入れ、立論や批判を行う際の根拠として位置づけた。このことは、陸隴其にとって、この時期における朱子学の多様な在り方への向き合い方でもあったのだろう。

注

- ① 山田耕一郎「監察御史陸隴其と捐免保举問題」(『神田信夫先生古稀記念論集——清朝と東アジア』、山川出版社、一九九二年)、滝野邦雄「李光地の眼から見た陸隴其と于成龍」(『経済理論』三〇四号、和歌山大学経済学会、二〇〇一年)を参照。また、陸隴其の経世観については、三浦秀一「湯斌と陸隴其——清初士大夫の人間理解と経世意識」(『文化』第四十八巻第一・二号、東北大学文学会、一九八四年)がある。

- ② 田村将「雍正二年の文廟祀改革とその時代背景——主導した人物の特定とその影響力を中心として」(『日本中国学会報』第五十八集、日本中国学会、二〇〇六年)を参照。
- ③ 『四庫全書総目』巻九十四・儒家類四、「読朱随筆」提要、中華書局、一九六五年、七九八頁。
- ④ 『王学質疑』の出版については、中純夫「張烈の『王学質疑』について——陽明学批判の論理」(『明代中国の歴史的地位——山根幸夫教授追悼記念論叢』、追悼記念論叢編集委員会、汲古書院、二〇〇七年)を参照。
- ⑤ 「四書翊註者、祁州前賢刁蒙吉先生所著也。昔平湖陸稼書先生宰靈寿、購得是書、歎為程朱正脈、欲捐俸付梓不果。」(刁包「四書翊註」巻首、周毓崑「四書翊註序」、『四庫全書存目叢書』経部第一七〇冊、莊嚴文化事業、一九九五年、五頁)
- ⑥ 「近世学者、所以儒仏混淆、而朱陸莫弁者、以異説重為之蔽障、而其底裏是非之実不白也。」(陳建『学部通弁』巻首「自序」、『叢書集成新編』第二十三冊、「正誼堂全書」本、十二頁)
- ⑦ 『朱子晚年定論』とその思想的な意義については、吉田公平「『朱子晚年定論』」(『陸象山と王陽明』、研文出版、一九九〇年)、中純夫「中国と朝鮮における朱熹に関する考証的研究」(『日本儒教学会報』第二号、日本儒教学会、二〇一八年)を参照。なお、松野敏之「陸隴其「未発已発」考」(『国学院中国学会報』第五十九輯、国学院大学中国学会、二〇一三年)にも『朱子晚年定論』への言及がある。
- ⑧ たとえば、「嘉靖中、粵東陳清瀾先生有学部通弁一書、備言其弊、不識先生曾見之否。近有舍親刊其書、謹以呈覽。又有大興張武承著王学質疑一編、言陽明病痛、亦甚深切著明。僕新為刊之、今并附呈」(陸隴其『三魚堂文集』巻五「答山西范彪西進士書」、東北大学附属図書館蔵本、教養〇八二・六〇)と言い、また「嘉靖時、粵東陳清瀾、曾著学部通弁一書。其言朱陸異同尤詳、曾見之否。近年新刊其書於南中、当另覓奉也。外程氏読書分年日程、言工夫次第、確是程朱家法。弟新為刊行、謹奉正師門諸書。」(『三魚堂文集』巻七「答栢郷魏莚形」)とも言う。
- ⑨ 吳光西重輯・郭麟增補『陸稼書先生年譜』巻上、康熙十九年条、褚家偉・張文玲点校『陸隴其年譜』、中華書局、一九九三年、七十七頁。

- ⑩ 「八月初九日。在武林寓中閱養氣章、中多疑義、未盡晰也。思得大全說之、自學庸至論孟、約計一載、庶得要領。此志蓄之已期年矣、為試事急迫、不能行此事。今已得暇、可行吾志、歸即當從友人借說耳。」(楊春侗点校『三魚堂日記』卷一、丁酉条、中華書局、二〇一六年、一頁)
- ⑪ 『三魚堂文集』卷八では「旧本四書大全序」に作る。『三魚堂四書大全』に収録する序文は、門人たちが出版に際して『文集』から採録したものであり、「三魚堂四書大全」という名称も門人たちの命名による。『陸稼書先生年譜』巻上、康熙二年条(『陸隴其年譜』、二十二頁)では、「増訂四書大全」と称している。
- ⑫ 「是編有前後兩編。前編以彥陵張氏所輯講義為粉本、而嚴其去取、復編明季諸先輩之說、不啻百余家、附綴於上。始於順治戊戌至康熙癸卯而書成。後編則甲辰以後所輯、朱子語類、兼采呂晚邨・仇滄柱兩先生講義・文評、諸名家制芸、至說史而可以發明者、亦必附載。學有淺深、見有精麤、兩編不可合一、故擅加一統字別之。」(陸隴其『四書講義困勉錄』巻首、陸公鏐「序」、国立公文書館蔵本、二七七一—一四四)
- ⑬ 陸隴其『三魚堂四書大全』巻首、「三魚堂四書大全序」、「四庫全書存目叢書」経部第一七〇冊、六六〇頁。
- ⑭ 理学関係の書籍が北京でも入手しにくい状況にあったことについては、「(四月)初九。……愚以一紙写理学諸書、如讀書録・居業録・困知記・木鍾集及敬軒・敬齋・康齋・整庵・魯齋・草廬之集、徧問前門諸坊、無有也。」(『三魚堂日記』巻三、乙卯条、六十三頁)とも述べている。
- ⑮ 「乙卯、授膠城令、欲邀余之任所、余已受其同譜蒼巖顧子聘、將之大梁、固辭之。臨行、授余学菴通弁一書、蓋陳清瀾先生所作也。挾以往、晨昏潛玩、益信儒仏之殊、有同冰炭。只本天・本心二語、了然無復可疑。但於四子書中、猶多障義、無由就正。」(『四書講義困勉錄』巻首、陸公鏐「序」)
- ⑯ 「康熙十七年歲在戊午春月吉日、当湖後学顧天挺蒼巖敬題於滎陽公署。」(『学菴通弁』巻首、顧天挺「顧序」、十四頁)
- ⑰ 「(八月)初九日。……嵩来(顧天挺を指す)。将学菴通弁刻成、此举最為有益。」(『三魚堂日記』巻五、戊午中条、一一〇—一一二頁)
- ⑱ 「旧冬都門獲接尊札并領学菴通弁、正欲覓便致謝、忽聞家變狼狽南歸」(『三魚堂文集』巻六「答同年顧蒼巖表叔」とある。「家變」とは父の逝去

を指しており、「是月(十一月)朔計至、即徒跣出都、二十九日抵家」(『陸稼書先生年譜』巻上、康熙十七年条、「陸隴其年譜」、七十五頁)と呼応する。

⑲ 『学菴通弁』はそれまでに「北京図書館蔵明嘉靖二十七年刻本」(『四庫全書存目叢書』子部、第十一冊)と顧憲成が序文を寄せた万曆三十三年(二六〇五)刊本とが存在していたようだが、「正誼堂全書」本の巻首には顧憲成や顧天挺、張伯行らの序文を冠していることから、陸隴其が目にしたのは万曆刊本と考えられる。

⑳ 「丁亥之夏、奉命撫閩、道過嘉禾、囑別駕項君求先生未刻書。項君從先生之婿曹公名宗柱者、尽探其家藏、乃得是編及說礼志疑・問学録・松陽鈔存四種」(陸隴其『說朱隨筆』巻首、張伯行「原序」)、『叢書集成新編』第二十二冊、「正誼堂全書」本、三九六頁)とある。なお、『說朱隨筆』のテキストには「正誼堂全書」本の他に、「四庫全書」本・「陸子全書」本・和刻本(天保四年「一八三三」刊本)がある。この内、和刻本の巻首には康熙三十六年(一六九七)に趙鳳翔が著した序文を附しており、また「正誼堂全書」本とも体裁が若干異なる部分もあるので、本書はもう少し複雑な伝承を辿っていることが予想される。

㉑ 「前編。上卷所載、著朱子早年嘗出入禅学、与象山未会而同、至中年始其非、而返之正也。中卷所載、著朱子中年始方識象山、其說多去短集長、疑信相半、至晚年始覺其弊、而攻之力也。下卷所載、著朱陸晚年冰炭之甚、而象山既没之後、朱子所以排之者尤明也。」(『学菴通弁』巻首、一二頁)

㉒ 『說朱隨筆』巻二、四〇六頁。

㉓ 『学菴通弁』巻一、一六頁。

㉔ 「愚按、此条亦必是晚年為象山而發。後又有答程正思一書言「子静將朱子答書謄本四出、則已載於学菴通弁」(『說朱隨筆』巻三、四一三頁)と見える。

㉕ 『学菴通弁』巻三、二〇頁。

㉖ 『学菴通弁』巻三、二十二頁。

㉗ 「(正月)十二。周好生来、出莊渠遺書相示、内有与余子積書云、……余在嘉定、得莊渠遺書、止有大学指帰等雜著、並無奏議・書牘、蓋止其後

集、好生所得乃其全也。」(『三魚堂日記』卷四、戊午上条、八十三―八十四頁)

②⑧ 『三魚堂日記』卷四、戊午上条、八十四頁。

②⑨ 「文公論心学凡三變、如存齋記所謂「心之為物、不可以形体求、不可以聞見得、惟存之之久、則日用之間、若有見焉。」此則少年学禪、見得昭昭靈靈意思、及見延平、尽悟其失。後会南軒、始聞五峰之学、以察識端倪為最初下手处、未免闕却平時涵養一節工夫。別南軒詩所謂「惟慮酬酢处、特達見本根」、答叔京書尾謂「南軒入处精切」、皆謂此也。中和旧說、論此尤詳。其後自悟其失、改定已發未發之論、然後体用不偏、動靜交致其力、功夫方得渾全、此其終身定見也。祭南軒文、始所同躋、而終所共棄、其此類也。」(魏校『莊渠遺書』卷三「与余子積」、国立公文書館藏本、三一四―四一)

③⑩ 早年・中年については、戴銑『朱子実紀年譜』卷一にそれぞれ「紹興二十三年」夏、始受学于延長平李先生之門(朱傑人・嚴佐之・劉永翔主編『朱子全書(修訂本)』第二十七冊、上海古籍出版社・安徽教育出版社、二〇一〇年、二十四頁)、「(乾道三年)八月、如長沙、訪南軒張公」(同三十三頁)とある。晩年については、後述する「中和旧說序」の記載による。

③⑪ 『読朱隨筆』卷三、四一―頁。

③⑫ 『三魚堂文集』卷五「答秦定叟書」。

③⑬ 陸隴其『問学録』卷一、第十条、『叢書集成新編』第二十三冊、「正誼堂全書」本、四二〇頁。

③⑭ それぞれ、『皇明通紀前編』卷二十五、弘治十二年条(四庫禁燬書叢刊補編)第十三冊、北京出版社、二〇〇五年、二二九頁)と『陽明先生要書』附録(『四庫全書存目叢書』集部第四十九冊、三六八頁)に見える。

③⑮ 「第一書、言道体也。第二書、言性体也。第三書、合性於心、言工夫也。第四書、言工夫之究竟处也。見解一層進一層、工夫一節換一節。」(劉宗周『聖学宗要』「中和說四」、吳光主編『劉宗周全集』第二冊、浙江古籍出版社、二〇〇七年、二四三頁)

③⑯ 林月恵「劉戡山論「未發已發」——從「觀念史」的考察談起」(鍾彩鈞主編『劉戡山學術思想論集』、中央研究院中國文哲研究所籌備处、一九九八

年)では、劉宗周の『聖学宗要』について検討を行う。

③⑰ 『朱子全書(修訂本)』第二十一冊、一三一―一五頁。

③⑱ 「說得大意已是、猥不是限於一時、拘於一处。但有覺处不可便謂之已發、此覺性原自渾然、原自寂然。」(『聖学宗要』「中和說」、二四〇頁)

③⑲ 「朱子自注云「此書非是。但存之以見議論本末耳。」而劉念台聖学宗伝取此以為中和說之一、且評云、「說得大意已是、猥不是限於一時、拘於一处。」念台雖知此非朱子定論、然深有契焉、則以与其学合也。」(『読朱隨筆』卷一、三九七頁)

④⑰ 「這知覺又有箇主宰处、正是天命之性統体、大本達道者。端的、端的。」(『聖学宗要』「中和說二」、二四一頁)

④⑱ 「此条所謂主宰、未曾明指、想必是指心。念台取此以為中和說二、而以為指天命之性則失之矣。後一書又云、「天理人欲之判、中節不中節之分、特在乎心之宰与不宰」、可見其指心。」(『読朱隨筆』卷一、三九九頁)

④⑲ 『聖学宗要』「中和說三」、二四二頁。

④⑳ 「第三書又以前日所見為未盡、而反求之於心、以性情為一心之蘊、心有動靜、而中和之理見焉、故中和只一理、一处便是仁、疑即所謂立大本行達動之枢要、然求仁工夫只是一敬、心無動靜、敬無動靜。」(『聖学宗要』「中和說四」、二四三頁)

④㉑ 「畢竟是求之未發之中、歸之主靜一路。然較濂溪為少落辺際。蓋朱子最不喜儻侗說道理、故已見後、仍做鈍根工夫」(『聖学宗要』「中和說四」、二四三頁)

④㉒ 「此書即念台所謂中和說三、而此一段則其所刪者也。通一書大抵言心有動靜而非復如中和旧說矣。此与答湖南諸公一書意同、其為朱子定論無疑、而念台謂「此是朱子已見得後、仍用鈍根工夫」、則是欲伸已見而巧於抑朱子之說也。」(『読朱隨筆』卷一、三九九頁)

④㉓ 『四庫全書總目』卷九十七・儒家類存目三、「紫陽大指」提要、八二五頁。

④㉔ 嚴佐之・戴揚本・劉永翔主編『歷代「朱陸異同」典籍萃編』第二冊(上海古籍出版社、二〇一八年)には、『紫陽大指』の整理本が収録されており、その巻首には応搗謙と王焯の序文をそれぞれの文集から転載する。

④㉕ 『三魚堂文集』卷五、「又答秦定叟書」。

④9 以上の論述は、あくまでも陸隴其の主観に拠るところが多い。秦雲爽は『紫陽大指』の中で、「或曰、「陽明此數語、名言之失歟、抑大義亦有謬歟。」「謬謬也」(秦雲爽『紫陽大指』卷六、『四庫全書存目叢書』子部第二十二冊、一三三頁)と述べている。また、秦雲爽は「答胡季隨」(『伝習録』巻下)への案語として、ある人が中和旧説と陽明の説とは同じなのではないかという問いを立て、両者の相違も議論している。(『紫陽大指』巻二、九五―九十六頁)

⑤0 「乾道三年八月、先生如長沙訪南軒、論已發未發三日夜、不能合意。先生当日又有一説、而南軒之説即先生三書意也。先生前与何叔京書、已有「欽夫之学、超脱自在、見得分明、非吾輩所及」之語、至是蓋始深契焉。乃後又有一變。是先生生于已發未發之論、蓋三變而後定云。」(『紫陽大指』巻一、九十二頁)

⑤1 「嘗合朱子一生学問前後不同之故考之、朱子之学、伝自延平。延平教人静中觀喜怒哀樂未發氣象矣、教人反覆推尋以究斯理矣。朱子四十以前、出入仏老、雖受学延平、尚未能尽尊所聞。是以有中和旧説、有答何叔京諸書、与延平之学、不免矛盾。及延平既没、朱子四十以後、始追憶其言而服膺之。」(『三魚堂文集』巻五「答秦定叟書」)

⑤2 「先生乃儻侗以為朱子之一転関、窺先生之意、却似以居敬為重、而看窮理一辺稍輕、雖不若陽明之徒、尽廢窮理、而不免抑此伸彼。故答李中孚書、遂以大学補伝為可更、而以陽明之独崇古本為能絶支離之宿障、為大有

功於吾道、亦是看窮理稍輕之故。」(『三魚堂文集』巻五「答秦定叟書」)

⑤3 なお、秦雲爽は『紫陽大指』の中で、「居敬・窮理、朱子未嘗不並重、其实朱子以居敬為立本。此義甚精、非实有体験、未易知也。所苦後人浅視居敬、未思深衷。因以朱子為尚味本原、又有喜談窮理、仍以朱子中年所悔為楷模者、非未窺其堂奥、即立異以自高者也」(『紫陽大指』巻首「凡例」、八十五頁)とも述べている。

⑤4 高攀龍の静坐説への批判については、馬淵昌也「宋明期儒学における静坐の役割及び三教合一思想の興起について」(『言語・文化・社会』第十号、学習院大学外国語教育研究センター、二〇一二年)を参照。

⑤5 「合先生之論陽明者言、謂其真能為己矣。良知之説、合於性善之旨矣。崇古本大学能絶支離矣。惟無善無惡一語、不能無弊、又是名言之失、而非大義之謬矣。晚年定論、雖不無曲成己意、而採答叔京諸書、又未為尽過矣。所不滿者、惟不分未發已發一節耳。」(『三魚堂文集』巻五「答秦定叟書」)

(付記) 本稿は科学研究費助成事業19K12945(若手研究)による研究成果の一部である。

(東北大学大学院文学研究科助教)